

## 例会記事

### ■第567回例会 観察会 奈良公園 2008年(平成20年)4月29日(火・祝)

今回の例会は皆さんにナラノヤエザクラと若草山のレンゲツツジ群落を観賞していただきたく計画をした。ナラノヤエザクラは例年この頃が満開になるので開催地として奈良公園を選択した。

ナラノヤエザクラは桜シーズンの最後を飾るサクラであるが、その名前の著名さに較べて実際に花を観賞したという人は非常に少ないサクラである。梅原徹会員から「花を見たことがないから久しぶりに参加させていただきます」と挨拶をいただいた。幹事としてありがたい挨拶であった。

集合場所の行基噴水前広場は多くの待合い場所で混雑を極めるため、現在は県営登大路駐車場の一画となっている興福寺勸禅院東円堂跡に移動して例会の挨拶を行った。

この場所は無住が『沙石集』(1283)において東円堂前にナラノヤエザクラがあると記載した東円堂跡付近で、以降ナラノヤエザクラの名所旧跡として著名である。その縁で安土桃山時代から江戸時代初期にかけてナラノヤエザクラは東円堂桜と呼ばれていたことがある(川端2001、2006)。石垣で囲まれたナラノヤエザクラの樹の後ろには「八重桜古蹟」と彫られた古い石碑がある。奈良県で最初に博覧会を開催(明治八年)した奈良博覧会社が東円堂跡にナラノヤエザクラを植え整備したとき(明治九年)の石碑である。

ナラノヤエザクラについては戦後に三好学発見説が唱えられた。何等根拠のない虚説であり天然記念物へ申請をおこなった岡本勇治に対する礼を欠いた愚説である(川端1999、北川1997)。

(注、三好学『天然記念物調査報告書第四輯』には「知足院の奈良八重桜は何れの頃より伝はれるか詳ならず、同院の外奈良県師範学校の門内及官幣大社春日神社の境内にも同様の桜あれども何れも小樹なり」とある。「何れも小樹」とあるが春日神社のものは老樹であり三好の誤解である。三好発見説になんら根拠のないことは三好自身がこのように述べており明白である。)

奈良公園にはナラノヤエザクラが数多く植栽されている。地下道を通り東側に出て「みどり池」付近のナラノヤエザクラをゆっくり観賞した。

吉城園、依水園前を通り小さな小川に沿って上流へ向かう。以前この小川の石垣ではヤブサンザシやカリガネソウを観察している。ヤブサンザシは新芽を吹いていたがカリガネソウは確認できなかった。すでに抜き取られたのであろうか。

東大寺参道を横切り、さらに上流の手向山八幡宮へ向かう。途中にナラノココノエザクラの札が架かったサクラの木があった。平野弘二前会長が発表されたナラノココノエザクラについての論考のコピーを持参され、皆さんに配布していただき木の下でご説明をいただいた。

(注、平野氏は和名をナラココノエザクラとされているが、命名者の坂田静夫(当時の公園課長)がナラノココノエザクラとしているので「ノ」を挿入して報告させていただく。)

花や葉について詳細に説明いただいた。<sup>めしべ</sup>雌蕊の数が二つのものは果実が二つになることがあり、木の枝にそれが実際に確かめられた。多くの方が写真に納めていた。ナラノココノエザクラの原木がこの先のトイレの裏、川に沿ったところにかつてはあった。三年前の春と記憶しているが奈良公園管理事務所から原木が突然倒れ枯死したことを知らされた。倒れた木は中が空洞になっていたそうである。残念ではあるが致し方ない。

平野氏は説明の中でナラノヤエザクラの増殖法について問いかけてこられた。ナラノヤエザクラが挿し木では増殖できないため、その継続性に以前から疑問を感じておられる。私は葉からの継続性を返答した。そこで紙面をお借りして若干私説を述べてみたい。

私は挿し木が一般化したのは後の時代ではないかと考えている。当初は葉からの増殖であったと思っている。写真は実生苗から育てたものを移植したものである。主幹が枯れ、葉が成長した姿である。サクラの木はうまく移植すればこのような姿にならないが、造園業者の移植でもときどき主幹が枯れ、葉が成長したのが見られる。ナラノヤエザクラも山で発見したものを移植し、主幹が枯れ、葉が育ったのではないかと考えている。葉からの増殖はナラノヤエザクラにおいても容易である。最初の木がこのようであれば後継樹を得ることは可能である。しかし葉からの増殖は葉の数に制限され、一度に多くを得ることはできない。そのために大量に増殖が可能な挿し木が考え出されたのではないだろうか。これが一番自然に考えられる園芸技法の進歩ではなかろうか。伊勢大輔が詠った時から約140年後の『七大寺巡礼私記』(1140)には東門堂のサクラは遅咲きであることを記録している。また藤原定家(1162-1241)の日記『明月記』には八重桜の記事がしばしば見られ、すでに園芸的な技術が確立していたのではないかと考えている。このように見ればナラノヤエザクラの継続性については疑問が解けるのではないかと思う。文献からもその継続性に疑いはない。

若草山山麓にもナラノヤエザクラはたくさん植えられている。会員の皆さまも堪能されたでしょう。入山料¥150を払い山に入る。現在はシカ害を避けるため前面に柵が設置され、直接山へ登れない。今回は南の登山道を登ることになる。この登山道口にアサダがある。皆さま不思議に感じてもらえ植栽されたものではないかという声も聞かれた。アサダは春日山(御蓋山)でも滝坂道の入口近くにあり、林縁付近にはかなりの数が見られる。若草山においても同様である。

登山道にはヒメバライチゴが花をつけている。ヒメバライチゴはフォーリーが奈良で採集したもの(1899)が基準標本となっている。当時は大仏鉄道の時代で大仏駅が現在の奈良駅の北方にあり、駅より転害門を通過して奈良公園に入るコース(大仏殿へ一番近い)があった。フォーリーがこの道



を利用し若草山で採集した可能性もある。ヒメバライチゴはシカ害にあっているために小さいが立派に花を付けている。

点々と淡い緑の固まりが見えるのは全てコガンピである。若草山は夏から全山がコガンピの薄い褐白色花で占められる。このような景観は他では見ることができない。シカ害の極致であろう。

山焼きで有名なススキは現在ほとんどが植栽されたものである。自然のものは数割であろうか。「エ、本当？」と驚かれた会員も多かった。シバを全部張り替えた地域もあり、このように若草山はシカの影響を大きくうけ瀕死の状態である。在来種の多くがほんの限られた地域やススキに隠れて残っている状況である。

一重目東斜面のレンゲツツジ群落に到着し、斜面に登り、花を観察いただいた。この地のレンゲツツジは山焼きの影響を一番うけている地域で今年は花が少なかった。花芽の一部が焼けていた。しかし、保全作業を行わなかった4年前まではほとんどが焼け、花をつけることは珍しかった。

楽しみにしていたイヌザクラはまだ蕾の状態ではほんの一部が開花しているのみであった。連休の後半には満開になるだろう。この付近から俗称大谷にかけてはハンノキが多い。この木もシカは食べない。小さな芽生え株をたくさん見ることができる。

一重目北端のレンゲツツジ群落に到着。ここから大谷にかけての群落は山焼きから除外されているため多くの花を見ることができた。年々立派になっている様子である。

大谷では皆さん気付いておられなかったがコヒロハハナヤスリを踏んで通った。それほど一面に生育しており、気付いた方は若草山の魅力を感じられたのではないのでしょうか。谷では早朝から採られたワラビの摘み残しを捜された方も多かった。今夜の一膳ほどは採ることができたのでは？ワラビの採集は昔からの慣習で許されている。

できるだけ急斜面を避けて登っていただいたが、若草山がこんなに標高があるかと考えてもいなかった方が多い。午後にまだ登るのですかと聞いてこられた方もいた。

三重目の広場で昼食。鶯塚古墳前で記念写真を撮り、三重目に一本植えられたカスミザクラの残り花を観賞した。ナラノヤエザクラより若干花期が早い。

午後は春日山原始林遊歩道を下った。緩い勾配の日差しをさえぎる林内である。急峻な坂を下るのではと心配された方もいたのでは…。

皆さんは林床の植物が貧弱でその荒廃ぶりに驚かれた。春日山原始林もまた荒廃著しい状況である。わずかなトウゴクサバノオやコミヤマスマシレ、ミヤマハコベ、タニギキョウが花を付けていた。水谷川ではクリソウが一株蕾を付けていた。傍らにはサンシチソウの株もあった。

今回の例会は変則的なかたちで案内させていただいた。若草山や春日山原始林がかかえている現状を知っていただいたと思います。

(注、フォーリーについては角田充氏の調査(北川先生への私信)を北川尚史教授よりご教授いただいた。)

#### [参考文献]

平野弘二、1998、ナラコノエザクラの学名と特徴、植物分類地理49:77-80

川端一弘、1999、ナラノヤエザクラ天然記念物指定についての一検証、奈良植物研究会会報67

川端一弘、2001、江戸時代前期のナラノヤエザクラの記録、奈良植物研究23

川端一弘. 2006. 『多聞院日記』に記録されたナラノヤエザクラ. 生物学史研究77

北川尚史. 1997. 岡本勇治—奈良県植物研究の先駆者—. 覆刻版大和植物志. 大和精版印刷

(川端一弘 記)

【参加者】 (50名) 飯原 今枝 今村 植田 上田真 馬田 馬場 梅原 岡崎房 奥野 小倉  
織田二 柿原 狩野登 狩野裕 川端 熊谷 後藤 権藤 杉本 鈴木 高橋 竹田 竹村 立石  
田中光 中谷 中村哲 名越 奈良 丹生 日出幸 平野 藤澤 増尾 松井 真山 溝畑 宮崎  
森脇 箭木 山崎 山住 湯浅 横山 吉野 米谷 木寺 八木橋 加美